# 葵上

ワキヅレ（大臣）　官人
ツレ　神子
シテ　六条御息所
狂言　従者
ワキ　横川僧都

地は　京都
季は　雑

大臣詞「是は朱雀院に仕へ奉る臣下なり。さても左大臣の御息女。葵上の御物の気。以ての外に御座候ふ程に。貴僧高僧を請じ申され。大法秘法医療さまざまの御事にて候へども。更に其しるしなし。こゝに照日の神子とて隠れなき梓の上手の候ふを召して。生霊死霊の間を。梓に掛けさせ申せとの御事にて候ふ程に。此由申し付けばやと存じ候。やがて梓に御掛け候へ。



神子「天清浄地清浄。内外清浄六根清浄。より人は。今ぞ寄りくる長浜の。蘆毛の駒に手綱ゆりかけ。

シテ一声「三つの車に法の道。火宅の門をや出でぬらん。夕顔の宿の破車。やる方なきこそ悲しけれ。

次第「浮世は牛の小車の。〳〵。廻るや報なるらん。

サシ「凡そ輪廻は車の輪の如く。六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ。昨日の花は今日の夢と。驚かぬこそ愚なれ。身の憂きに人の恨み

の猶添ひて。忘れもやらぬ我思ひ。せめてや暫し慰むと。梓の弓に怨霊の。これまで顕はれ出でたるなり。

下歌「あら恥かしや今とても忍車の我姿。

上歌「月をば詠め明かすとも。〳〵。月には見えじかげろふの。梓の弓のうら弭に。立ち寄り憂きを語らん。〳〵。

シテ「梓の弓の音は何くぞ。〳〵。



神子「東屋の母屋の妻戸に居たれども。

シテ「姿なければ訪人もなし。

神子「不思議やな誰とも見えぬ上臈の。破車に召されたるに。青女房と思しき人の。牛もなき車の轅に取りつき。さめ〴〵と泣き給ふ痛はしさよ。

詞「若しかやうの人にてもや候ふらん。

大臣「大方は推量申して候。唯つゝまず名を御名乗り候へ。

シテ「それ娑婆電光の境には。恨むべき人もなく。悲しむべき身もあらざるに。いつさて浮かれ初めつらん。唯今梓の弓の音に。引かれて顕はれ出でたるをば。如何なる者とか思し召す。是は六条の御息所の怨霊なり。我世に在りしいにしへは。雲上の花の宴。春の朝の御遊に馴れ。仙洞の紅葉の秋の夜は。月に戯れ色香に染み。はなやかなりし身なれども。衰へぬれば朝顔の。日影待つ間の有様なり。唯いつとなき我心。物憂き野辺の早蕨の。萌え出でそめし思ひの露。斯かる恨みを晴らさんとて。是まで顕はれ出でたるなり。

下歌地「思ひ知らずや世の中の。情は人の為めならず。

上歌「我人の為めつらければ。〳〵。必ず身にも報ふなり。何を歎くぞ葛の葉の。恨みはさらに尽すまじ。

〳〵。

シテ「あら恨めしや。今は打たでは叶ひ候ふまじ。

神子「あら浅ましや六条の。御息所程の御身にて。うはなり打ちの御振舞。いかでさる事の候ふべき。唯思し召し止り給へ。

シテ「いや如何に云ふとも。今は打たでは叶ふまじと。枕に立ち寄りちやうと打てば。

神子「此上はとて立ち寄りて。妾は跡にて苦を見する。

シテ「今の恨みは有りし報い。

神子「嗔恚のほむらは。



シテ「身を焦がす。

神子「思ひ知らずや。

シテ「思ひ知れ。

地「恨めしの心や。あら恨めしの心や。人の恨みの深くして。憂き音に泣かせ給ふとも。生きて此世にましまさば。水闇き。沢辺の蛍の影よりも。光る君とぞ契らん。

シテ「妾は蓬生の。

地「もとあらざりし身となりて。葉末の露と消えもせば。それさへ殊に恨めしや。夢にだに。かへらぬ物を我契り。昔語になりぬれば。猶も思ひは増鏡。其面影も恥かしや。枕に立てる破車。打ち乗せ隠れ行かうよ。〳〵。

大臣詞「如何に誰かある。葵上の御物の気。いよ〳〵以ての外に御座候ふ程に。横川の小聖を請じて来り候へ。



狂言「シカ〳〵。

ワキ「九識の窓の前。十乗の床のほとりに。瑜伽の法水をたゝへ。三密の月を澄ます所に。案内申さんとは如何なる者ぞ。

狂言「シカ〳〵。

ワキ「此間は別行の子細あつて。何方へも罷り出でず候へども。大臣よりの御使と候ふ程に。やがて参らうずるにて候。

大臣詞「唯今の御出御大儀にて候。

ワキ詞「承り候。さて病人は何くに御座候ふぞ。

大臣「あれなる大床に御座候。

ワキ「さらばやがて加持し申さうずるにて候。

大臣「尤にて候。

ワキ「行者は加持に参らんと。役の行者の跡を継ぎ。胎金両部の峰を分け。七宝の露を払ひし篠懸に。不浄を隔つる忍辱の袈裟。赤木の数珠のいらたかを。



さらり〳〵と押しもんで。一祈りこそ祈つたれ。なまくさまんだばさらだ。

シテ「如何に行者。早帰り給へ。帰らで不覚し給ふなよ。

ワキ「たとひ如何なる悪霊なりとも。行者の法力つくべきかと。重ねて数珠を押しもんで。

地「東方に降三世明王。

シテ「南方軍荼利夜叉。

地「西方大威徳明王。

シテ「北方金剛。

地「夜叉明王。

シテ「中央大聖。

地「不動明王。なまくさまんだばさらだ。せんだまかろしやな。そはたやうんたらたかんまん。聴我説者得大智恵。知我身者即身成仏。

シテ「あらあら恐ろしの般若声や。是までぞ怨霊。此後又も来るまじ。

地「読誦の声を聞く時は。〳〵。悪鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もこゝに来迎す。成仏得脱の。身となり行くぞ有難き。〳〵。





底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第七輯』大和田建樹 著